

An anime-style illustration of two young women in school uniforms. The woman on the left has long black hair and blue eyes, wearing a dark blue sailor-style uniform with a red bow. The woman on the right has long blonde hair in pigtails with blue ribbons and blue eyes, also in a similar uniform. They are in a classroom setting with a chalkboard and a window in the background. The lighting is warm, suggesting sunlight from the window.

佐富家の複雑な事情

午前央人

佐富家の美人姉妹あずさとこずえ。
二人の間には秀真という男兄弟がいる。
兄と妹と、姉と弟。
秘めた欲求が、三人の関係を少しずつ狂わせた。

佐富家の複雑な事情

目次

第一章	姉×弟	4
密かな原因	5
妹のシャワーを覗く弟を覗く姉	14
お姉ちゃんが手伝ってあげる	24

第一章

姉×弟

密かな原因

あの日も、それがきっかけの一つだったと思う。

「D A N Z A、D A N Z A ♪♪」

抑えきれないウキウキ気分を表すかのように、私は謎の歌を口ずさみながらパソコンを立ち上げ、何度訪れたかわからないお気に入りサイトへのショートカットをダブルクリックする。

「ん？」

微妙な違和感に首をかしげる。

あるはずのものが無い。

そんな気がしたけれども、それがなんなのかわからない。

仕方なく私は引っかけりを感じながらもそれを無視して、いつもの行動に移ることにした。

「うわー、今日もいっぱいリリースされてる」

新発売のA Vのサンプル鑑賞。

誰にも知られていない私だけの密かな楽しみ。

それを今日も楽しむために、私は一本目の新作から順番にサンプルムービーを再生していった。

「あれ？」

ここでついに、私は違和感の正体に気づいた。

「音が出てない」

動画が再生されているのに、その音声は再生されない。

いや、再生はされているんだろうけど、私の装着したヘッドフォンからは聞こえてきてはいない。

ためしにボリュームを思い切り絞ってスピーカー再生に切り替えてみたら、画面の動きに合わせて小さなあえぎ声が「アン、アン」と私の耳に届いてきた。

「そんなあ……」

ずっとお気に入りを使ってきたマイヘッドフォン。

うんとすんとも言わなくなったそれを、私はじっと見つめる。

確かに、そこそこ酷使してきたと思う。

でも、これはかなりいいお値段のする高級品のヘッドフォンだ。

それこそ、プロも使っているという触れ込みのものをかなりの覚悟で購入したのを覚えてる。

「まあでも……そこその年数使い込んだのも事実よね」

ヘッドフォンは消耗品。そんなことはわかっていたけれども、いざダメになってみるとかなりのショックを受けてしまう。

「はあ……買い直しても、同じ音質で聞けるとは限らないのよねえ」

もうダメなのはわかっているのに、未練がましく私は何度もヘッドフォンプラグを抜き差ししてみる。

パソコンの設定もいろいろいじってみるが、やっぱりヘッドフォンからはなんの音も聞こえてこない。

「しょうがないかあ……」

大事にしまっておいた買ったときの箱にヘッドフォンをしまい、そんなことに意味がないとはわかっていつつも、大事にそれを片付けてしまう。

「今日のところはこれで我慢かな」

いつ買ったかもわからない、100円ショップのイヤフォン。引き出しの中に放置されていたそれを、パソコンのイヤホンジャックにつなぐ。

「うん。まあ、聞こえる。一応、ね」

ザリザリとした、なんとも言えない低音質。

中音域ばかりが強調されていて妙な奥行きがあったりもするけれども、一応ちゃんと音

は出ている。

「聞こえないよりはまし……って程度か」

私は我慢しながら、サンプル鑑賞に戻った。

この中途半端な気持ちをどうにかしてくれる逸品に、出会えることを祈りながら。

――数十分後。

「ふう。なかなか豊作であった」

別に何かを食べたわけでもないのに、私はお腹をポンポンと叩きながら精神的充足感を表した。

最初はかなり不満だったけど、集中してしまえばイヤホンの不備はそれほど気にならなかった。

もしかするとあのヘッドフォンにそんなに拘る必要なんかないんじゃないか、とか考えそうになったけれどもそれは急いで否定した。

そのこのだわりを捨ててしまうのは、なんかダメな気がしたのだ。

なにがダメなのかはわからないけれども、とにかくダメな気がした。

「さて、あとは……」

新作A V チェックで、ムラムラがかなり高まってきた。

あとは、このムラムラをお気に入りA Vを見ながら解消すれば私の日課は無事おしまいとなる。

その準備をしようと、私は手のひらの消毒をはじめた。

「敏感な部分に触れるんだものね。きれいにしないと……」

シュツシュと除菌スプレーをかけ、シャカシャカと手のひらをこすり合わせる。

自分で言うのもなんだけど、手のきれいさならこずえにも負けてないように思える。

「どっちかって言うと、こずえの手はぷにぷにな感じだものね。きれいっていうよりも、かわいい手、かな」

結局最終的には妹を褒めてしまう。

仕方ないのだ。だって、私の妹はかわいい。

こずえが一番かわいいと思っているのは、きっと姉である私なのだから。

「あー、今日はなんとなくレズものの気分」

こずえの事を考えたからではないけど、今日のおかずはレズものにすることに決めた。

私の一番のお気に入りS痴女系の作品だけでも、レズものも嫌いではない。

というか、私は女優さんの身体をきれいに映した作品が好きなのだ。

そういう意味で、レズ作品は女優さんの身体が同時に二人分楽しめて二倍美味しい。

「えーっと、確かこの間ちょっと気になる新人さん見つけたのよね。あったあった。そう

そうこの子。矢沢みあちゃん。うん。清楚そうな顔してるのに、インタビューとかでものすごいこと言っちゃったりしてるのよね」

いつものポジションに陣取り、体勢を整えて動画を再生する。

ちなみに、私は動画はダウンロード派だ。

昔はDVDで集めていたときもあったけれど、あれは家族に見つからないようにするのがちよつとめんどくさい。

それに、量が集まるとかなりかさばるしね。

『んっ、あああああ……』

『ふふふ、エッチな顔。みあちゃん、ほんとにエッチ好きなのね』

『だって……ああんっ。だって気持ちいいから』

『いけないコ』

『んはああんっ！』

画面の中で、二人の女優さんが絡み合う。

お互いの舌を絡ませあい、唾液が互いの唇を濡らす。

乳房と乳房がピッタリと張り付き、固くなった乳首をクリクリと刺激し合う。扇情的なその光景に、私は息を荒げていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……すごい……きれい……んんんっ」

しつとりと濡れてきた秘所に指を這わせる。

でも、一番敏感な部分にはまだ触れない。

じつくりと焦らしてから、最後に一気にスパートする。

それが、私のオナニーの定番コースだった。

『あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……お姉さまぁ……ひびきさぁん』

『みあちゃん……あああんっ』

二人の美形さんが、お互いを刺激し合う。

ベテランのひびきさんと、新人のみあちゃん。

最初は防戦一方だったみあちゃんが、少しずつひびきさんを追い詰めていく。

『んあああ……あっ……あっ、あっ、あっ。そこ、そこ……そこをされると私……

んんんっ！』

ひびきさんの股間に顔を埋めているみあちゃん。その顔は、もうひびきさんの愛液で

ビッシヨリになっていた。

そして……。

『んっ！　んっ！　んっ！　ダメ、イク！　イツちゃう！！！』

ベテランのひびきさんが新人のみあちゃんにイカされる。

そのタイミングに合わせて、私も自分のクリトリスを思い切り刺激した。

「んはあああつつっ！！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

ひびきさんに合わせてイク。それが、ここ最近の私のお気に入りだった。

そして、今日もそうするつもりだった。

でも……。

「ちょ、ちょっと……これ、なんの音？」

小さなノイズが、私の集中を妨げる。

いつもなら気にならなかったかもしれないそれが、今日はどうしてか気になって気になって仕方がなかった。

「あ、これのせいかな」

私は耳から外したイヤホンを見下ろす。

思っていたよりも悪くなかった100均のイヤホン。

でも、さすがにいつものヘッドフォンに比べたら密閉性が月とスッポンほどにも違ったようだった。

そして、画面の中ではひびきさんが盛大に潮を吹きながら絶頂を迎えた。

「チッ」

イクタイミングを逃してしまった私は、お腹の底にムカムカしたものを感じた。

たっぷりと溜まったムラムラムが、ムカムカへと変換されてしまった。

「まったく……こんな夜中に誰よ一体。廊下でゴソゴソ変な物音立てて」

もちろん、思い当たる人物は妹か弟しかない。

妹はまだ帰ってきてないはずだから、おそらくその犯人は弟の方だろう。

私は、夜遅いんだから静かにしろと一言注意してやろうと、身だしなみを整えて部屋をあとにした。

妹のシャワーを覗く弟を覗く姉

「なにあれ……」

部屋を出た私は、妙な体勢で廊下を歩く弟の後ろ姿を目にした。

なにかに集中しているのかこちらにはまったく気づかない様子で、弟は脱衣所へと続く扉を慎重に開いて中へとスルリと身体を潜り込ませた。

私はこっそりそのあとをつけて、薄く開かれたままの扉の隙間から脱衣所の中を覗く。
すると……。

「は？」

私は一瞬、自分が何を見ているのかわからなかった。

その直後には、それがA Vの中の出来事のような気がしてきた。
でも、それは違う。

そこは実際に自分の家の脱衣所で、あそこにいるのは私の弟……佐富秀真だったから。
そして、弟の視線の先には……。

「なる……ほど。なるほど？」

自分で納得しかけてから、納得できるような出来事ではないと即座に気づく。

それでもなんとか私の頭は、そこで何が行われているかという事実だけは認識することができた。

すなわち、遅く帰ってきた妹が、シャワーを浴びている。

そして、それを弟が覗いている。

しかも弟はズボンのチャックを下ろして、大きくなったアレを出してしごいている。

アレ……つまり男性器。

弟は、妹のシャワーを覗きながらオナニーをしているのだ。

（ちよつとちよつと、待ってよ……これ現実？ ホントに？ 実はVRでAVを見てるとかじゃなくて？）

最近話題のVR AV。何度か体験したこともあるけれど、私はまだまだだと思った。なにしろ、画質がダメなのだ。

たぶんVRにするための画角の関係でそうなってしまふのだろうけど、4Kの画質に慣れてしまった今では、あのザラザラ映像ではダメだ。

いくら現実感があつて近くにいるように見えても、あれじゃあ女性の身体がきれいに見えない。

ビジュアル重視の私にとっては、VRはまだまだの技術だった。

（って、そうじゃなくて）

V R A V 批評をして現実逃避していた自分の意識を引き戻す。

そんなことよりも、今は目の前のことのほうが大事だ。

なにしろ、弟がオナニーをしている。

しかも、妹のシャワーを覗きながら。

「あれ……やっぱりそうだよな？ おちんちん触ってるもんね」

こちらからだと言角になってはつきりとは見えないが、でも動きからしてきつとおちんちんを触っていると思われる。

「オナニー？ オナニーだよな？ 妹見ながら、オナニーしてるんだよな？」

すりガラスになったバスルームへの扉。そこに薄っすらと、シャワーを浴びる妹の姿が映っている。

弟はそれを凝視しながら、必死で右手を動かしていた。

「やば……まじでこれヤバ……オナニーだよ。弟のオナニーだよ。見ちゃった……私、見ちゃった」

はじめてA Vを見たときのような興奮が、私に襲いかかってきた。

というか異常な状況が、A Vの中にいるかのような錯覚を私にもたらした。現実なのに現実じゃないみたいなの。

V R よりも、今の状況のほうがよっぽどV R だった。

っていつても全然ヴァーチャルじゃないから、ただのRなんだけれども。

「え？ あれ？ もしかして……」

そんなことを考えているうちに、弟の動きが変化してきた。

まるで何かをこらえるかのように、背中が丸まっていく。

そして壁についていた手が、グツと丸められて力が込められていく。

「あれって、そうだね……私もあのとき、あんな感じになるもんね」

性に目覚めたころからずっとそれを実践してきた私は、オナニーに関しては人一倍詳しいという自負がある。

そして、それが間違っていない証明かのように、弟は唐突にそのときを迎えた。

「あっ！」

ビクビクと震えながら、弟が床に向かって射精した。

ビチャビチャと撒き散らされる精子。

しばらく硬直したあと、弟はどこか物悲しい表情を浮かべながら、それをタオルで拭いて後始末をした。

「ふうー」

私はゆっくりと、絶対に物音を立てないように気をつけながら脱衣所への扉を閉める。

「見ちゃった……な」

いまだに胸がドキドキと高鳴り、全身の体温は上がったまま。

オナニーの邪魔をされたムカムカは完全に吹き飛び、それを倍にしたような勢いでムラムラだけが蘇っていた。

「見ちゃった……」

頭の中に、弟のオナニー姿の残像が残っている。

目を閉じてても、その姿が消えることはない。

「見ちゃった……私……秀真がイクところ……」

今まで、私は男性の裸には興味がなかった。

もちろんそれはリアルではなくて、A Vの中の男優さんの身体だったけれども。

男優さんの中にもいろいろな種類がいる。

若い人、おじさん、きれいに鍛えられた身体の持ち主、ダルンダルンのちよっとおばけみたいな身体の人、イケメン、キモメン。

中には、女の子みたいなかわいい顔をしている男優さんもいた。

「でも……」

秀真のアレを見たときほどの衝撃は、それらのどの男優さんからも受けたことはなかった。

だからこそ私は、今まで女優さんメインでA Vを楽しんできたのだ。

「おちんちん……どんな感じなんだろう」

男優さんのおちんちんなら、モザイク越しにだけれども腐るほど見てきた。

もしかすると普通の男の子よりも、私はいろいろな種類のおちんちんを見てきたかもしれない。

でも、どのおちんちんにも私は興味をそそられなかった。

それなのに私は、秀真のおちんちんが気になって仕方がなくなってしまった。

「秀真……秀真のおちんちん……んんんっ」

オナニーの痕跡を残さないように整えたばかりの服を、私の手がたくし上げる。

それはまるで自動的なようで、私はほとんど意識しないまま自分の乳首を刺激していた。

「ああああ……」

興奮で乾いた唇を、舌で舐める。

「変態……変態よ。妹のシャワーを覗きながらオナニーなんて。あいつ、ホントの変態よ」

ブツブツとつぶやきながら、意識が少しずつ現実から離れていく。

「まるでA Vみたい……あいつ、A Vに出てくる登場人物みたいな変態よ……」

自分がいつもおかずにしていたA Vの世界。

それが突然、目の前に現実として現れた。

「そんな変態な弟を見ながら……弟のオナニー思い出しながら自分もしてる私も……ああんっ。変態、かな……んっ、んっ、んっ、んっ」

いつもなら、安全な部屋の中で思う存分A Vの世界にひたりながらしているオナニー。それをなんと今日は、ほとんど無防備な廊下でしてしまっている。

しかも扉一枚隔てた脱衣所の中では、弟が妹のシャワーを覗いている。

もしかするとまた、二回目のオナニーをはじめているのかもしれない。

そして弟の張り付いたそのすりガラス一枚向こうにも、シャワーを浴びる全裸の妹が存在している。

「全裸の……こずえ……」

もう何に興奮しているのかも、自分でよくわからなくなってきた。

A Vで言うのなら、どんなジャンルなんだろう。

近親モノ……覗きモノ……痴女モノ……隠しカメラ……透明人間……。

今まで見てきたA Vが頭の中でフラッシュバックする。

そしてそれらを見ていたときの興奮も入り混じり、もはや私の高ぶりは引き返せない境地まで到達してしまっていた。

「んはああっ！ あっ、あっ、あっ、やっ、はっ、あっ、んっ、んんんんっ！！！」
壁一枚向こうには、弟の秀真がいる。

そのことを意識しながら、必死で声を抑えようとする。

でも……。

「無理……無理……声……あっ、あっ、あっ、あっ……声が出ちゃう……」

どこか演技っぽさの入る私のあえぎ声。

自分でもそれが、A Vの中のものを模倣したものだということがわかる。

でも、それが興奮した。

A Vの中の登場人物になりきることで、私はより一層興奮することができた。

「んうううううっ……んっ、はっ、あっ、はっ、やっ、はっ、あっ、ああああんっ」

クチュクチュと卑猥な音が自分の指先から聞こえてくる。

部屋でしているときでも、こんなに濡れたことはなかった……気がする。

見ると、まるでおもらしでもしたみたいに太ももが濡れていて、そこから垂れた液体が

廊下の床をわずかに濡らしていた。

「やだ……やだ……こんなになって……ああんっ。私、こんなに濡れちゃって
るうううう」

潮吹きするA V女優さんに、少しだけ憧れていた。

そして自分も、もしかしたらそれができるかもしれないと思った。

ワクワクとした期待が、興奮に拍車をかける。

私の指はさらに加速し、クチュクチュからグチュグチュへと漏れ出る音も変化していった。

そして……。

「んっ、くっ、あっ、はっ、やっ、はっ、あっ、あああああああっ！　イクツ！

んああああああっ！！！」

プシュッ！　と、何かが弾けるような感覚とともに、私のそこから少量の何かが吹き出した。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

それはすぐに勢いを失い、タラタラと内ももを濡らすだけになる。

でも……。

「はあ、はあ、はあ……もしかしてあれが……潮吹き……かな」

朦朧とした頭で、憧れていた女優さんと同じことをできたかもしれないという感慨に浸る。

でもそれも、しばらくの間だった。

「あ、やばっ」

壁一枚隔てた向こう側、そのさらにもう一枚向こう。

バスルームで、シャワーの止まる気配がした。

ということとはつまり……。

カチャツと慎重の上に慎重を重ねたような小さな音を立てながら、脱衣所の扉が薄く開かれる。

そして限界ギリギリと思われる狭さをスルリと抜けて、弟が廊下に抜け出してくる。

（まあ、そうなるよねえ）

当然の展開に、私は呆れたような納得したようなアシンメトリな微妙な表情を浮かべた。

そんな私の目の前には、驚きで硬直した弟の姿。

私は手早く服装の乱れを直すと、弟の手を引いて廊下をあとにした。

お姉ちゃんが手伝ってあげる

「あ、あず姉……」

無言で私の部屋に連れ込まれた秀真。

自分がしていたことをどこまで知られているかを探るように、おずおずとした視線で私を見ている。

その視線に、なぜかゾクゾクとした悦びのようなものを感じてしまう。

（あれ？ 私って……そういう趣味あったっけ？）

なくはない……と思う。というか、たぶんある。

なにしろ、S痴女モノは好物の一つだからだ。

でもあれは、作品の中の女優さんが美しく責める姿が大好きだったというだけの話だ。

自分であんな風にしたい、なんて思ったことは一度もない……はず。

（ないはずだけど……もしかしたらあったのかな？）

潜在的には、あったのかもしれない。

だからこそ、S痴女モノなんてジャンルに興奮していたのかもしれない。

（でももしかすると……）

一つの推論が頭の中に浮かんできた。

（もしかすると私は、作品の中の女優さんみたいに振る舞うことに、悦びを感じているのかもしれない）

弟の……秀真のさっきの視線は、S痴女モノでM役の男優さんがよく女優さんに向けていたものに似ている。

たぶん、そんなシチュエーションが、私に興奮を感じさせているんだと思う。

たぶん……。

たぶんだらけでこれっぽっちも確信を持ってないまま、それでも私は目の前の状況に対処していく。

「もしかして……見てた？」

怖がるような怯えたような、それでいてどこか少しだけ強がっているような弟の視線。少しでも隙があればここから逃げ出してやるという気概も、わずかに感じる。

私はそんな秀真の視線にムラムラしたものを感じながら、弟の身体をポンと押した。

「あっ」

予想外の衝撃に、秀真は一步うしろに下がる。

私はそのままさらに詰め寄り、ズイズイと秀真のことを押し込んでいった。

「見てたよ、秀真がなにしてたか」

「うっ」

「全部、最初から最後まで見てたんだから」

秀真の顔色が変わる。

まるでこの世の終わりみたいないな絶望感に包まれながら、秀真がガクリとうなだれる。

（知ってる……このシーン……A Vで見たことある）

確か家庭教師か女教師か、どちらかは忘れちゃったけど、そんな感じの役柄の女優さんが、年下風の男優さんの秘密を握って脅すシーン。

私は何度も、その作品を見ながらオナニーをした。

（あの作品だと、このあとは……）

記憶の中の女優さんをトレースするかのようになり、身体が勝手に動いていく。

まるで超高性能なV RでA Vを見ているような気分になりながら、私は弟を押し倒した。

「なっ……ちよっ、何するの……あっ」

「ふふふ。これでしょ？　これが悪いんでしょう？　この変態チンポがあるせいで、妹のシャワーなんか覗いちゃうんでしょ？」

「うううっ」

押し倒した弟にまたがり、股間のあたりを自分の股間でスリスリと何度も摩擦する。

「やめ…：あっ！　そんなにしたら…：うううっ」

明らかに秀真のソコが体積を増してくる。

私のおしりの下でムクムクと大きくなっていく秀真のペニス。

私はその状況に煽られるように、さらに自分の役柄にハマっていった。

「ほらほらほら。自分でもわかるでしょ？　自分のソコがどんな風になってるのか。やっぱり変態？　変態なの？　実の姉にこんな風にされて、おちんちん勃起させちゃう変態なの？」

「あああっ。やめて…：やめてあず姉…：姉さんっ」

私の腰に手をやり、私の動きを止めようとする秀真。

でも、それくらいで私の責めは止まらない。

だってこのシーンは、まだまだはじまったばかりなんだから。

「やめてじゃないでしょ。だってここは、こんなに…：」

ベルトを緩め、秀真のズボンを下ろす。

すると待っていましたとばかりに、勃起したおちんちんがこんにちはをしてきた。

「ほーら」

「ううっ！」

「こんなに大きくなっているんだから。ふふふ」

記憶の中の女優さんのセリフを、覚えている限りでほぼ正確にトレースする。

そんな私に対する秀真のリアクションは、ほぼ期待通りのもの。

もしかすると作品の中の俳優さんより、秀真のほうがずっとずっといい反応をしてくれているかもしれない。

その証拠に、私のアソコはどんどん熱くなってきてしまっていたから。

「どう？ お姉ちゃんの手。気持ちいい？ 気持ちいいでしょ？」

秀真のおちんちんを握りしめ、上下にしごく。

女優さんになりきっていたせいか、自分でもびっくりするぐらいにスムーズにそれができた。

「そん、な……くっ！ んはっ！」

「ほらほらほらほら。我慢しないでいいんだよ？ イキなさい。私の手で出しちゃいなさい。出したいから、妹のシャワーなんか覗いちゃったんでしょ？ 出せば、スッキリしてそんなことしなくてもよくなるかもよ？」

「ち、が……そうじゃ……あああっ」

「いいんだよ、出して。さっきみたいにな、たっぷり射精していいんだよ？ 臭い臭い精液たっぷり出して、変態みたいになことしなくてもいいように、スッキリしちやいなさい」
「くううっ！！！」

私の手の中で、さらに熱く固くなっていく秀真の弟ペニス。

さっきは角度とかのせいであまりよく見えなかったそれが、今は私の目の前にある。

興奮で視界をチカチカさせながら、私はその弟ペニスをじっと見つめながら、シコシコと勢いよくこすり続けた。

「だ、ダメだよっ。あず姉、ホントにつ！　うううっ」

私の手首を掴んで、その行為をやめさせようとする秀真。

といっても、その力はそれほど強くない。

女の私でも、その気になれば簡単に振りほどけるほど。

きつと口ではあんなふうに言ってるけれども、きつと秀真も心の奥ではもつとされることを望んでいるんだろう。

私のA V脳が、勝手にそんな風に判断する。

そして、それに従うように身体の方も行動してしまう。

シチュエーションに完全に浸りきっている私には、それを押し止める方策はなかった。

「んんんっ。姉さんっ！」

無防備にさらされた秀真の下半身。

大きく足を開きながらそれをまたいで、私はその部分を手ではない別の場所で刺激し始めた。

熱くなった、私のアソコで。

「ほらほらほらほら。このほうがいい？　手よりもスマタ？　スマタのほうが好き？」

「うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ」

私が腰を前後に揺するたびに、秀真が短いうめきを漏らす。

下着一枚越しに感じる、秀真の硬いペニスの熱。

勃起したおちんちんが、こんなに熱いなんて想像もしていなかった。

私のソコも熱くなっているけれども、秀真のペニスはそれ以上に熱く感じられた。

それとも、秀真の方では私のソコを熱いと感じているのだろうか。

私はA Vの中の登場人物になりきりながらも、第三者的視線を保ちながら今の状況を分析していた。

そしてそれもまた、私に妙な興奮を覚えさせていた。

「姉、さん……うううっ。なんで、こんなこと……ああっ」

「なんでって、決まってるじゃない。弟がこれ以上妹に変なことしないためよ」

「そん、な……僕は……」

「ほらほらほら。ここ気持ちいいでしょ？　姉さんの下着でこすられて、すごく気持ちいいでしょ？」

「くっ！」

私はA Vの中で女優さんがしていたように、自分の下着を横に引っ張って少しだけずらした。

「えっ！　うわっ！」

途端に感触が変わる。

秀真が驚いて声を漏らしたが、私もびっくりして声を出してしまいそうだった。直接触れた、おちんちんとおまんこ。

その感触が、こんなにも衝撃的だとは想像もしていなかった。

「んっ、んっ、んっ、んっ……すごいよ秀真のおちんちん……熱くて固くて……ああっ。このままだとお姉ちゃんの中に入っちゃいそう」

「そ、それは……あああっ……ダメだよ姉さん。あず姉……それはさすがに……」

台本通りの反応。

秀真がああA Vを見ていたとは思えないけど、でもそう思えるくらいにああシーンを忠実に再現していた。

そして、このあとはどうするか決まっている。

もちろん、ああA Vのように私はこうするのだ。

「んはああああっ……くっ！　んくううううううっ……！！！」

「えええっ！　ね、姉さんっ！？」

秀真の亀頭を膣口に押し付け、角度を合わせてそのままグツと腰を押し込んだ。

意外なほどの強い抵抗のあと、ブツンと伸び切ったゴムがちぎれるような感覚がして、私の奥深くにまで熱い塊が侵入してきた。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

ズキズキとその部分が痛む。

凄まじい熱の塊が、下腹部に収まっているように感じられる。

それでも私は作中の登場人物になりきって、ゆっくりと腰を動かし始めた。

「んっ、くっ、うっ、ふっ、んっ、んっ、んっ、んんんんっ」

それは痛みというには激しすぎた。

熱く熱せられた鉄の棒を、傷口に押し付けてこすっているような感じ。

というかたぶん、それそのものの感覚なのだろう。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

しかしそれでも私は、動きを止めなかった。

なにしろ作品の中では、女優さんは気持ちよさそうにしていたのだから。

「うううううっ。姉、さんっ！」

「んんんんんっっっ！！！」

そしてどうやら、弟の方はそのとおりになっているようだった。

あのA Vの中で男優さんがしていたように、自分の上にまたがった私に対して強く腰を押し付けてきた。

つまり、秀真のペニスがさらに私の奥深くへと突き刺さっていく。

「はっ、はっ、はっ、はっ……すご、い……すごい……こんな……あああ。これ、が……セックス……ううう。こんなに熱いなんて……こんなに気持ちいいなんて……くっ！ 想像もしてなかったっ」

私の思っている以上にそういう知識があったのか、それとも本能なのか、秀真は意外なほど巧みに腰を動かしてきた。

そしてそれは、私に気持ちよさを与えてくれた。

そう、気持ちよくなってきたのだ。

痛みとはまったく別の感覚が、その部分から湧き出してきた。

「ああああ……そうよ。そうでしょ？ セックスは気持ちいいでしょ？ シャワーを覗きながらオナニーなんかするより、私とセックスするほうがずっと気持ちいいでしょ？」

まるで私が、経験豊富でもあるかのようなセリフ。

本当のところを言えば、私だって今回のこれが初めてのセックスなのだ。

でもそんなこと、言えるはずもない。

だってそんなセリフ、作品の中にはなかったからだ。

だから私は記憶の中のA V女優さんになりきって、秀真にそんな風に言ったのだ。

「うううっ…セックス…セックス…これがセックス…あああっ。僕と姉さんの…
…くっ！ はじめての、セックス…あああっ」

秀真のその【はじめて】が、どっちの意味で言われたのかはわからない。

確かに私もはじめてのセックスだったけど、そんなに目立つほど出血しているようには
見えない。

というか、角度的には秀真からはほとんど確認できないはずだ。

まあ、反応からしたらバレバレなんじゃないかとは思うけど、秀真にはそこまでの余裕
はないと思う。

とりあえず私はそのあたりのことは放置することにして、記憶の中に浮かび上がってき
ているA Vのシーンを、そのまま再びトレースすることにする。

それが、私にとってはいま一番気持ちのいいことだったから。

「んはあああっ…そう、だよ…これがセックスなんだよ。入ってる…入ってるで
しょ？ おねえちゃんのオマンコに、弟のおちんちんが入っちゃってるでしょ？ 姉と弟
でセックスしちゃってるの。私と秀真、本当はしちやいけないことなのに…姉弟でセッ
クスしちゃってるのっ」

「ううううっ」

別に近親相姦趣味はなかった……と、思う。

まあそれなりに作品は見てたけれども。

でも、もしかすると秀真は違っていたのかもしれない。

実際に妹のこずえのシャワーを覗いていたし、もしかしたら私のこともそんな目で見ていたのかもしれない。

その証拠に、秀真の鼻息がさらに荒くなってきた。

姉と弟でしているという事実を突きつけたことが、秀真の興奮をさらに煽り立てたようだった。

「くうううっ！！　姉さんっ！　あず姉！　あずさっ！　おねえちゃんっ！！！」

いろいろな呼び方で私に呼びかけながら、猛烈な勢いで秀真が私を突き上げてくる。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ！　すごい……すごいよ秀真！　秀

真の弟チンポ、おねえちゃんすぐ気持ちいいよっ！」

「ううううううっっ！！！」

脳内のAVコレクションから、秀真が強く反応しそうな単語を引き出し、その言葉をいやらしく秀真に投げかけてあげる。

そしてその思惑通りに秀真は興奮し、欲望のすべてを解き放つべく私の一番奥深い部分へと勃起ペニスを突き立てた。

そして……。

「んはああああああっっっ！！！」

「くうううっ！！！」

ドクンドクンと、私の胎内に弟の精液が解き放たれる。

ペニスの熱とはまた違った熱さのそれに、私もまた絶頂を迎える。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

ピクピクと震えている私の腰をしつかりと捕まえながら、荒く息を吐き出す秀真。

その呼吸のたびに、ピクリピクリとペニスが震えるのがわかる。

その微細な振動ですらも、私の中では快感に変換されていた。

「はあああああ……」

（続きは本編で）

